

人の世に熱あれ！
人間に光あれ！

新 冠 旗

大阪市大部落研
情宣紙 No.9
1969.6.16

差別を許さぬ大学教員と学生

「部落研究」の教科書にあらざるもの」

全市大の学生・院生・教職員諸君へ

我々部落問題研究会は、ここにあらわ
る学園で斗われている学園斗争の提起
した問題を正しく受けとめ、その問い
に部落研として答えていこうと思つし、
又答えなければならぬと考える。

現在の全日本学園斗争は、今まで大学が
守ってきたと思つていた「大学の自治」
がどういふものであったのか、その中
味はどうなのか、あるいは大学におけ
る学園研究・教育が一体何の為に、だ
れの為におこなわれてきたのか、大学
は当然の義務である社会的使命を本当
に果たしてきたのか、という根本的な問
いかけを投げかけている。この問いが

けは何も大学のみならず、現在の教育と
小中高を含むそのものに対する問いが
けでもあり、ひいては現在の体制そのも
のへの問いにもなる。このような問
いかけに対し我々部落研は、教育の名に
おいて差別をおこなわれている現在の教
育をきつぱりと拒否し、決して差別を許
さない、あらゆる差別をなくしてゆこう
という視座で過去一貫して斗ってきた。

これは部落問題そのものをもって本
質から当然でくるものである。我々部
落研は、一九六一年の市大女学生差別
事件を契機に、差別事件が発生したのは、
今まで大学において、本来当然なされて
いなければならぬ使命が果たされていな

かつたからであるとの観点から大学当局
の責任を追究し、一九六五年に出された
部落解放運動の四十年にわたる運動の成
果である同知事審議会答申を契機に、
大学の社会的使命を果たせる斗いとして、
又教育の内部革新斗争として斗った。そ
して一九六八年度から社会計画論（部落
問題講座）の設置を打ち出した。この社
会計画論は今までの講座のような、単に
知識のための知識ではなく、矛盾の集
中である部落問題を知り、研究すること
によって部落解放のために、あるいは
現在の社会の矛盾に対して目を向けると
してゆく者を作りだす役割をもっている
と考える。しかしながら、この社会計画

論については各学部において受講を対する
不平等があり、又教育内容そのものにも不
十分異な存在している。そして大学当局は
この我々の主張を正しく受けとめ、自らの
使命としてこれに答えるのではなく、場を
たりのないままに過ぎるお茶をにこしてきた
のである。このようは大学の態度が今回の
「ハルメット差別事件」を生み出したので
ある。これは中たにおいて、差別をなくし
差別と斗ってゆく闘争を作り出すのではな
く、差別を助長し、温存してきたことの
一つのあらわれである。まさに教育の名にお
いて差別が行われてきたのである。これは
現在の小学校、中学校、高校教育にもあて
はまることである。今の教育は、差別と選
別の教育といわれるように、一定の画一的
な水準をもうけ、それについてこれないも
のは放つておくというものであり、子供の
可能性を最大限追求し、子供の能力に応じ
正しく教育してゆくことはなされてない。

このような差別と選別の教育を改め、正しい
教育にしてゆく一環として同和教育は位置づ
けらるるのである。同和教育とは部落解放教
育であるが、これは決して部落だけの解放を
めざしたものではないし、又部落だけの解放
などはないのである。同和教育とは、
まさに教育の原理なのである。だから同和教
育科目を設置することが大学における教育に
不可欠であると考える。従つて我々部落向
く研究公では、次の果を獲得してゆくことが
現在の全国闘争の提起している向いに対
し、又部落問題の重要性に対する一つの答え
であると考える。

一、社会計画論の内容充実、条件を保障せよ
二、同和教育科目を設置し、教職必須とせよ
しなしながら、この我々の科目斗争は決して
個別的な斗争として位置づけるものではない。
現在の教育のあり方そのものを、大学のあり
方そのものを問題とする闘いである。だから
こそこの闘いを全学的なものに広げ、教養力

リキキュラムの全面的改革、教育内容の変更
ひいては現在の教育政策への闘いを目ざさ
なければならぬのである。

教養カリキュラム全面的改革の為に、
すべてのクラス・ゼミ・サークルは、
部落研と共に立ちあがるのではない

次

「ハルメット差別問題」とは

我々部落研は五月一六日、学友が「非人同
盟連合」とハルメットに書き、行動している
事実を発見し、差別問題としてとりあげた。
部落差別は現実の社会の中において、実態と
して存在している。日本にはまだ、三百万人
の人が差別に苦しみ、またそれ故にこそ、
一人の世に熱あれ、人向に光あれと叫び、
全国において解放への闘いに結集している。
また、部落を温存している元凶の権力は、こ
の向題を直視することなく、誤ったイデオロ
ギーを教育・マスコミ等あらゆる機会を通じ
てまきちらしている。そして我々の意識に虚
偽のイデオロギーをどう入するのである。故
に我々は、不断に自己点検し、部落問題の本
質を追求し、部落解放への闘いに参加してい
かなければ、我々は無意識のうちに、部落差
別を温存し、あるいは助長する加害者となっ
てしまう危険性というものが存在してい
るのである。「非人」ということは、現在
の社会においては、とくに部落に対する差別
用語としても使用されている。「非人」とい
うる差別された部落の人の向題をめぐりに不
用意にこの語を使うことは許されない。